



関ヶ原軍記

二編 五

六

遠13
2207
18



徳川十五代記 編

春雨文庫 編

敵討 笹野權三代記 全部十冊

近世記聞 編

明治太平記 全

開明小説 鳥追於松實録 五十
大尾

肥長 鹿見嶋士傳 編

珍説 夜嵐實記 全

此書たるや出軍士卒の日記或は戦地より歸京せし探偵人等の説話子因り西國証討の如末と詳細せし第一の實録なり

近世小倉青木實記 全部

近日出来

近世松村春輔著 櫻田實録 全

這徳川家の旗下青木實太郎小倉藤長吉昌辰辰の春情事等暴借強談の悪事日本奥方艱難心苦と記し實録の及紙綴りたれ近世の珍書なり

書物 繪入 貸本所

東京牛込細工町 誠光堂

池田屋清吉謹白

関ヶ原軍記武編卷之五

目錄



一 和州勢 大聖寺の城攻責る事

一 并山に右京亮常猛を討つ事

一 富田藏人討死の事

一 并山口右京亮再度大勇戦討死の事

門入 遠 13
番 2207
巻 18

池清

同ヶ原軍記武編卷之五

和列辨 わつれんべん 大寺寺の城を攻る だいじやうじのしろをうごむ
并山に衣系 なみやまにえけい 大骨 だいこつ 獲 とら 取 と 形 かたち 事 こと



去程 きよけい 小 こ 城 しろ へ へ 比 ひ 前 まへ 田 でん 能 の 前 まへ 寺 じ 利 り 長 ちやう
大寺寺 だいじやうじ 城 しろ を を 攻 うご ら ら せ せ る る に に 山 やま 口 ぐち 衣 え
系 けい 骨 こつ が が 武 ぶ 骨 こつ を を 急 いそ ぐ ぐ 知 ち ら ら せ せ る る

とこらありありとありて先陣と撰
ちまはるまぢりり候らよりの
倭へ大手は幸清も右田代馬搦手
の一妻の富田彦人あり二陣を
奥村伴謙と横山山城を今次
長九郎左衛門不破丹波守と
候とて四方全騎の倭へ配りあり
その時一死候は不同んといは度

の旗責を能病し叶はるる
を信代旧好の徳孫の内務とて
しとこらありて富田と南つと
中より藏人とその席と居眠
ありて軍に評定をいさぶる候
あり書身定まりて富田彦人の
幸清手とら候らび以礼中と
新しと今居眠りの内子

歴々此西々此飛人々知行資
人乃能病りのまて先陣のる
弓矢との養を不致くわのひ
らるお君乃上さそて先手と作有
らん武つ此実わくお叶ひる難
く存ぞある只今城攻一番急を
仕り討免成しつら養と足中
よりく候く出陣仕るべし之連

彦を立くつり皆人そと若
と無どもかしもちつり此詞の
如くまぞ有つら部く山口衣系
免の武骨の合利の如く石堂山
中でお寄りこの所と退ぞ死
能橋まで武骨をと養ひ湖
武指八騎討ぬらんく鐘の丸
へ引入つりこのせりの追手より

も搦手此等近き一依く一青
ふも四房人等と分て種
丸松山の中を押しつり此等
より款入らんば容易く上る
まふと足へける在輕坡の急
をあげく鉄炮をおろす
攻寄せたり城中を山に在る
が乳母女武者あがむり此

巴清前飯類女も那中んと名
りるやどの形程あり在る
城中へ引入る松山の極の
ある岩石の上より矢倉堀
立形りて枝木を投りて
さうむ依くたふるが手
た又本城より助寄る
どもふる森多尾形在る竹村

傳右軍の 石川利之助 今村
春左衛門 瓜生孫四郎 服部
左衛門 南左衛門 八木重邦
飛丸の侍ひ 百余騎 雑兵二百
余人 下り来つて 銃炮を打交
互の隙がたゞし 一とく 富田
が手代りの 兵多く 討色りけり
大羽利長 怒り 尺のひ 能登り

軍兵 強弓の 攻破れと下知
せしむる 利長の 合身 四能也
利政の 軍兵 入り 去九郎左
衛門を 先手とて 能兵急
矢控 ぐんと 搦まるとの せり
正西より 前田の 兵士 湊井左馬
之助 葛尾 度十郎 文時 孫人
大言 今井 左衛門

等ハ危^ら竟^るの^い士^しと^ま先^まと^あ
身^み下^{した}と^あ既^いと^あ破^{やぶ}と^んと
一^いら^らに^い山^{やま}口^{くち}と^あ系^{けい}と^あ屯^{とん}と^あ見^み
て^あ堀^{ほり}と^あ入^いる^あ押^{おし}や^あが^あり^あ立^た羽^はの
と^あく^あ桓^{えん}武^ぶ天^{てん}皇^{わう}代^{だい}後^ご亂^{らん}平^{へい}赤^{せき}代^{だい}
慶^{けい}流^{りゅう}山^{さん}口^{くち}と^あ系^{けい}と^あ屯^{とん}と^あ水^{みづ}西^{せい}と^あ
ハ^い人^{ひと}の^あ知^ちり^あと^あら^あ別^{べつ}乃^の者^{もの}あ^あり^あと^あ
名^なを^ある^あが^あく^あ大^{だい}身^みの^あ錢^{せん}と^ああり

と^あして^あお^あと^あり^あと^あ終^{つひ}と^あ續^{つづ}け^あ
て^あ乳^{にゅう}母^ぼの^あ女^{にょ}武^ぶ者^{もの}と^ああ^あと^あり^あと^あ無^む
士^し二^に三^{さん}百^{ひゃく}人^{にん}と^あも^あと^あむ^あと^あぐ^あり^あと^あ立^た
む^あと^あ款^{くわん}と^あを^あ追^お拂^{はら}え^あんと^あ次^{つぎ}に^あ付^つけ^あ時^{とき}
お^あ賀^が流^{りゅう}の^あ下^{した}方^{かた}と^あ交^{くわい}角^{かく} 山^{やま}内^{うち}内^{うち}藏^{ざう}物^{ぶつ}
清^{せい}井^{せい}と^あ系^{けい}と^あ屯^{とん}と^あ一^い所^{ところ}と^あ放^{はな}て
錢^{せん}と^あを^あ寄^よせ^あと^あ右^{みぎ}系^{けい}と^あ屯^{とん}と^あの^あ中^{ちゆう}と^あも
と^あん^あの^あ槍^{やり}と^あ旗^{はたけ}と^あと^あ掛^かく^あと^あ三^{さん}本^{ほん}と^あ此^{こゝ}

銃を切らむと乳母を討り
とりて被銃を奪ひえり大刀
接ぐて踊りをり唯一太刀宛
ま向肩先掛く三人一なり
切伏せ又乳母も長刀を一方に
をま来た大音なる武時彦人
と娘あぬ人まで長刀を掛く
虎口とをひえのとをりよ

切く城の中より石杖本城を
うけく銃砲は打出る石
の若田野もをりぬく足
よりこの若田家の先陣
若田彦人並びに長九所左衛門
等下知して頼りおせぬ
足輕大將生田は序を奉
る物本領下と下知して

強く海入して討免さしせむ
山崎長右衛門の助け来りて攻流し
和ら次男山崎孫五郎并び小
泉人堀孝左衛門 細村福次左
衛門の助けつゞき争ひつゞらば
あつて相働しつゞらば
城をとりつゞらば在城日々書
おらぶ仍し明日攻流しと云

と云りつゞらば在城日々書
陣屋とりけ大將肥前守利長の
石堂山より本陣と云へらるる志が
城中に在る者おのれを争ひつゞらば
あり強し手冢國房人の手此
者及る人をおるぬらるる争ひ
足らぬ下れさるる争ひの中と
もせんく争ひぬらるる争ひ

魁角見へざればあや討免や
志うと更生免の是列
城知はらうく一たんの虎口
をとお尋ねるに富田藤人の城
下は免人の中乃手負れごとく
ふ成く明日此一書の前とてあ
がけうらの天晴を双は骨士るあ
り

富田藏人討免の事
并山口右京左衛門再び大書致自致
城の事

斯の事書明るれあまを
四方は事手籍の手と藤
く押来るに城平とても勢破
や款名あすらりと立路を狭る

倭虎はふり来り又軍將を
陰謀を盡し領を朝日のいふく
輝あかりの死人の陣より風と
立しりて金の巾帯は是物と
写回痛人大喜り秋子の若
た續け申といふも人々倭下三
身ごらり陰を扶きしと倭
の腹本より手紙をくはるくくと

おしりりり富田が総下并び
よ衆人を或百余人驚彼やき
青のりの主人あり心こし
らり死人の陣に倭一のあつ
是くよりめんくおらると一時
年群がり立ゆきつひく攻
のりら城をおそけしと先途と
階ぶ殺しよといふを歎念おの

一、城の堀を押し破り、既に陣の
丸ふき入時山口玄蕃先下知傳
へ云甲斐友方の老老う那の追
して富田を捕りてせしむる
右京免是とき、邦の者、
うるやうに、業と生捕り
せん、と大月此陰謀引提く山と
下り、欠来りておをむ乳母を

初より押纏ひく下り来り
そ外山口源左衛門、藤田下門
本の老老追く下り立く二百
余人押く下り、富田勢と幾
や声して、富田を右京免や
乳母、縲立らん又えのそと
へ追出さるる、富田屋人
を一寸も退さるべし、

りるに前よりい衣系免又換り
より乳母と門懸より富田
も味方の常士也也いし左女
より紐舟一寸も御うせん
て襪ひの意紐を切くく
上げ責てのういせと遊手
矢倉より引出して前田及先
陳富田藏人を新のうくあり

續ひく先陣より人を皆く
新の通りと節の素と一時
富田も大喜揚く百年代命
も君の一言も依て換ると武士
の手本とせんと呼こり
此方とつとつとととととと
矢倉より唯一飛手飛ぶ堀の
石垣より高りて免くくこの時

迷惑くしの縄をさし不きさし引
まきく麻よりしが燬塵よるりて
矢よりたり新田利長これを見て
愕然山口が振とるさ一青のりの
飛人ありつづけや續けと下
知きうるる右進手搦手鐘の丸
を四万余人の軍を一時にせり
立る城中ももころりる矢糧

よく丸踏ぐ場は廣く坐
乞士おるゆる此は良太田徳馬
を退年の石垣破りてころり
ころり鐘の丸より長九所丸集つ
先陣よりして新田能少守利
政又子余跡をやのり破りて
大ををころり世ところりる衣袋
丸有く死人の山越築身大

木大石城きふいしじょうに
無人城むねんじょうと
年とし控くわくもくもく天神てんじん比ひごと
くお御ごくく追手おしよりりの大回おほい
但たゞるる山崎やまざき古ふるつつも横山山城よこやまやまじょう
ちち勇ゆう村むら伴ばんああちち本ほん条じょう入いく布ふ城じょう
と乱らん入いるる一いつ時とき千せん火ひを放はなす
ららふ今いまののやや四よ方ほう八はち面めんのの人ひと
ふふりりんんをを是こゝ迄まで之こゝにに城じょう乃の山やま口ぐち云い

蕃相ばんさう隨ずいぐぐるる吉きち士し山やま村むら今いま村むら河が合あひ
お城おじょうををいいちちにに破やぶらられれ二十にじゅう人にん階かゝぶぶ
戦いくさふふららちちおおここししくく封ふうささ
られられをを吉きち蕃ばん元げん自じ害がいとと呼よびよりりけけ
ままばば嫡ちやく子し衣い宗そう屯とんををここんん中ちゆうでで之こゝ
と父ちちがが吉きち蕃ばん船ふねととままうう攻せうははにに王おう立た
ふふ放はなすす大おほ吉きち揚あかくく既いにに運えん命めい
そそてて生せい害がいははししりり色いろももししりり終はるる

倭^{やまと}く^くら^らば^ば人^{ひと}種^{たね}を^を奪^{うば}り^りて^てま^まる^る
幽^{くは}ら^らし^しとも^もあ^あら^らず^ずとも^もく^くら^らる^る
此^{こゝ}徳^{とく}あ^あれ^れた^た父^{ちち}を^を蕃^{ばん}先^{せん}討^うた^たる^るの^の上^{うへ}
い^いくら^{くら}か^かで^であ^あり^りあ^あら^らん^んど^ども^も我^{われ}
首^{くび}を^を討^うて^てい^いぢ^ぢる^る人^{ひと}も^も是^{こゝろ}一^{いつ}ぢ^ぢり^り
其^{こゝ}山^{やま}崎^{さき}長^{なが}門^{かど}の^の家^{いへ}人^{ひと}木^き崎^{さき}長^{なが}
左^{ひだり}衛^ゑつ^つと^とい^いふ^ふの^のあ^あり^り我^{われ}より^よく
知^しり^りこ^こら^ら武^ぶ士^しあ^あり^り年^{とし}以^もつ^つて^て入^い魂^{たま}よ

終^{つひ}り^り一^{いつ}事^{こと}あ^あれ^れを^を木^き崎^{さき}長^{なが}と^とき^き
城^{しろ}渡^{わたり}き^きあ^あり^りと^とた^たり^りの^の手^ても^もく^く
た^たが^がさ^さと^とう^うり^り衣^え乃^の手^てを^をさ^さす^す
そ^そよ^よ一^{いつ}て^て立^たる^るあ^あら^らず^ず生^{せい}実^{じつ}一^{いつ}
し^しり^りが^が指^{さし}時^{とき}を^を倒^{たふ}さ^さり^りた^たら^らず^ず
是^{こゝろ}と^と思^{おも}は^はる^る人^{ひと}舌^{した}と^と震^{ふる}ひ^ひ天^{あま}晴^{はる}
孫^{まご}一^{いつ}と^とき^き大^{おほ}女^{むすめ}夫^{おとこ}の^の左^{ひだり}衛^ゑ也^{なり}
と^と感^{かん}ど^どら^らり^りそ^その^の邪^{よこしま}山^{やま}口^{ぐち}が^が衆^{しゆ}人^{ひと}

ホおくれたるはくさぶらひの
合三百余騎討免其城を馬場
を立く城たるはりし武勇
此山は父子も利長の大軍両
先陣を破り居城におび
りこれ八月十日の事あり
既大智を此城を攻めし
前田を破行のいさよひに
孫田

城とく名を此一とて城前の
國は發向して北の店を攻て青
木紀伊守を退居さんと評定
一りり安ふ大谷刑部少輔吉
隆と小西の惣大將として
て武略の良將なりとて
城前の國を平均しり
同小西中此城を兼て堀尾

刀が居城とて入部とてその下
に三列池程幅とて喧嘩故未だ
未だ平より城代堀尾義内
同く劫ヶ由二人大將とて
軍乞入百人とておもり居る
ところより刑部少輔とて府中
の城を攻落すべしとて嫡子
大谷大守及次男木下山城を其

弁戸田武房と平塚固情と
奥山雅楽頭上田重久并び
赤尾銀板朽木秋丹お二万
余人とて抑つらる城の中
急て主人帯刀の来るとおも
たるに手負く浪士お居ける
大いおちとて所へは大军
平向つて義とて一とて殺す

故^この^まり^じ和^わ睦^{ぼく}と^せん^と評^{ひやう}派^ぱ
て^て世^せ派^ぱを^りり^り送^おり^りり^り終^はる
延^{えん}平^{へい}の^せの^き本^{ほん}紀^き倭^わを^りり^り
より^{より}大^{たい}谷^こ首^う中^{ちゆう}城^{じやう}より^{より}越^こえ^る
既^いく^く大^{たい}聖^{せい}寺^じの^し所^{じよ}城^{じやう}して^{して}利^り長^{ちやう}大^{たい}
軍^{ぐん}と^と年^{ねん}一^{いつ}南^{なん}城^{じやう}は^は押^お法^{ぽう}来^{らい}り
由^ゆ吉^{きち}隆^{りゆう}子^し建^{けん}は^はく^くひ^ひあ^ある^るを^を
あり^{あり}り^り延^{えん}り^りく^く及^{およ}ぶ^ぶり^り於^おて

い^いの^のの^のの^の城^{じやう}を^を明^{めい}海^{かい}より^{より}中^{ちゆう}より^{より}
を^を之^しの^のの^のの^の役^{やく}者^{しや}再^{さい}之^しより^{より}あり^{あり}び
り^りり^り延^{えん}時^じ刑^{けい}部^ぶが^が捕^とら^らる^るに^に
番^{ばん}細^{さい}お^お心^{こころ}を^を人^{ひと}あり^{あり}身^みを^を地^ちへ^へ出^で
陣^{じん}を^を中^{ちゆう}より^{より}由^ゆを^をし^し法^{ぽう}軍^{ぐん}へ^へあ^ある
の^のの^のの^のの^のお^お筋^{すぢ}を^をり^り世^せ時^じを^をり^り回^わ
武^ぶ將^{しやう}を^を平^{へい}塚^{つか}周^{しゅう}情^{じやう}を^を此^{こゝ}に^に支^し人^{ひと}
り^りり^りり^り南^{なん}由^ゆを^を中^{ちゆう}の^の城^{じやう}を

跡 美 跡 之 逆 心 あり 天 晴
ゆ ー さ 大 ぶ ー あり 唯 堀 尾 家
此 者 乃 ち 攻 殺 さ ー ー 志 々 々
る ー ー ー ー 中 々 々 々
刑 部 少 輔 名 々 々 々 々 々 々
り や ー 々 々 々 々 々 々 々 々
志 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
ー ー ー 々 々 々 々 々 々 々 々

お の ー 々 々 々 々 々 々 々 々
ー ー 々 々 々 々 々 々 々 々 々
利 長 々 々 人 々 々 々 々 々 々 々
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
関 東 之 二 人 々 々 々 々 々 々 々
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

て利長此勢と追ひ志りぞく
を二万の大軍を率
く八月四日の暮七の刻小の
店へ急ぐ諸君をよめりて
よお田勢と追のけりたり

油清

関ヶ原軍記二編卷の又後

油清

油清

関ヶ原軍記武編卷之六

目録

- 一 大谷吉隆謀略の事
- 一 并前田利長居城金澤は門入事
- 一 神君野忍小山より上り降起事
- 一 并福嶋正則評定乃席に發言の事

油漬

園ヶ原軍記武篇卷之六

大谷吉隆おおくやきちろう謀略ぼうりやく也なりといふ事こと

並なら前まへ田の利り長なが居ゐ城しろ重かさね澤さわ一いつ引ひ

入いらる事こと

曰いく大お谷おく刑けい弱じやく少すく捕と吉きち隆ろうといふ

店たへへ总すべ陣ちん一いつ々々謀ぼう略りやくといふ

中な川か宗むね侍ざむらい中なへへてて和わ州しゅう家け長なが

去秋を遂に決利長是と見て
大いなり抑ぐありて金法は退去
あつた後能ある居城とある
刑部少輔と云々果は出張と云
く富東の水玉箱は湯急陣と
御値に定あり夫より金津へ
湯を飲むるまよふ交も信交と
未法は津川はつて之旨より徳軍の

勢八万余騎より白川は御籠
本勢六万九千余騎七月廿四日
午の時刻小山平 御急陣
あり時より上旨経初のもの
法をよと 勢一万余石田三成が
謀略の彼を惹く湯工夫の内
よりあり志ありとくども人組の
斗り起く仍く抑ぐ抑ぐ徳太志

武集あり

神君御評定有

て 評出されられたるのせり

福崎左衛門右衛門政利常種

して徳政を励み治政一変

く先上り此逆徒を追討の旨

中上りあり

内府公上様の手押しの勢を

定められ上り追討の御評定之

云々曰く釣糸細く網は

垂るるごとく魚を釣ふらる

如くありて放駒のちり

凡そ謀略を細く永く強

く候つて放駒のと記さる

大切なるすむるひの業は

釣糸を仕立て

針脚そののいざねを必し

叶か登り〜はつ〜あぐ〜を
よ〜終〜する時をそ〜大の
用〜立也お調ひ〜する時を
り〜終〜するものあり
そ〜肉〜調略ひ〜そ〜旨とする
と〜そ〜あ〜と〜足〜身〜する時を
見〜身〜する時をそ〜旨〜とす也
或ひ〜そ〜先〜の〜人〜と〜大〜

利〜する時又大〜そ〜思〜する時
う〜終〜する時と考〜そ〜調略
そ〜これ〜悔〜する時香〜り
ま〜の〜味〜あり〜咄〜調略〜の〜り
そ〜ん〜と〜する時釣針〜
附〜る〜そ〜が〜如〜そ〜て〜矣〜の
吟〜身〜するものなり又附〜有
ても糸〜そ〜ら〜ら〜つて〜調ひ

ざら時を大きくぬら富とぬら
平生の人唯換置の二つと忍
色つゝしむへさる中之権略の
此二つ之儀くさる事あり
志うねる人さる者何よても
秋為し能身の中ある時にお
考へくそ飛と日きぬへさ
しつゝ代略さる事ありうら

よ熟りて必くは徳畧小の
なうしんまゝの人よあうく
おむちうさる事ありこの
時さうらと身く足へさる
あり忍うとゆきの二つ
らつて人平儀さる大谷吉
隆此後を知るゆへに前田
利長と相むちうして金法へ

追退せけしありけ後

吉隆も関ヶ原へ出張あり

去程より前田純前を利長を執

前の國水の庄を攻んとて先手

の早細呂木とあ張も大谷吉隆の

世時二万八千余騎を以て既北の庄

より居く是を以て我前田の大軍

と執りありしはりとも勝敗

區々ありて二三年も是れ

志するふも巧明といはるあり

うづぶその時多し予れりし心

えりし時今も悪味の起り之

石田三成が 徳川家と勝

故に改変する時永も左右の助け

と故く新骨と震へるあり

後をばこのせり加賀の軍乞大

勢よりて上り皇徳 近江の石小
笠横より時よりありて 御西宮
大の平利を去るる 居たりあり
鬼角利長とは 金法へ 進退く
居たりありと 又して 利長は 後
先中川宗律といふ 文の 達者あり
古右衛門の時より つけ 西宮へ
伺ふに 終るに け 度刑部 少輔 同侍

して 小玉へ 誘引を け 指の時あり
為あり せんといふ 宗律を 呼んで
好んで 謀書と 徳あり せんといふ 次
宗律を 辞退せらるるといふ とき
無陣と 徳あり せんといふ あり
取門せむら 小 終るに 一命と 名を
このころ 宗律も 是 非を
く 自 義と 利長へ 去れを 送る

をそそのの更急るれば唯威を以て
てまじらちり

此度上方一島千起り秀頼
々々下知として三指百騎
の軍をを集め小玉の惣
大おそく大谷刑部少輔吉隆
之万余人の軍を以て年
して敦賀を立く小の店

千出陣し利長と一戦せしむ
右大谷が二万余人の内を方
余人を嫡子大谷元一が
城をくく利長と對陣させ
跡に二万余人を船をもちつ
して吉隆大将として全
一対し入りしむく
平均せむまとの用を起り

あり其しるすの初回度と
師縁者故痛りくあど
此知しせ中へ唯くそ不忠
師安危をけ時也と

去快誠志しつめさせ宗傳が家
人平持七利長此陣へ参り
り宰相利長此書を見くあ
や鶴去あしんくもくく見る

小恙く宗傳と能書ゆその
書角約く廻るん大の平
おどろけん家水の店を攻落
して大谷と対陣十分
勝利とゆるとも居城重澤に
おつめらん高畑石見ちが小
勢を攻殺させ家人の妻子供
款の手く掛しるすの全族

ありそのく小松乃城の丹羽
長重も頼むとゆく我を返
うあるべきありと急ぶ急入
て小松乃城の押へる山崎長
門守 長九郎左衛門 吉田伝三
吉 高 山 南 坊 本 の 又 子 全 務 也
のくしとまじ 隆とと金沢の城へ
引入せらるる時く丹羽長重は起

長江口三層左衛門の打て出渡井
洗手は合致突くしと江口が武
骨を千りきり起新く大谷
吉隆も加刺乃大軍残る金
法江口退きられこれより小松
平拍しと今いそぎ易しと
大軍と率して敦聖へ歸り
これより法別は打くお軍

武揚たけのへとそとそと長ながひらり
武揚たけのへとそとそと長ながひらり

神志野かみしの取山とりのやまと上かみ旨しめ輝あかり起たち

并な比ひ評ひょう定ていの席せき二福ふく臨りん正せい刻こく發はつ云いの夏なつ

叔亦しやくよく 徳川内府公とくせんうちふくこうも七月二日
江戸表えどうらに御ご总陣そうじんあつてあつて督とく時とき

市いち道みち備び江戸えど 御ご城じやうよりより令れい侍しやう

おのりて又また 御ご進しん發はつの御ご備び備び
定めあり先まへ信しん丈ぢやうはは一いつをを作しやう建けん陸りく
奥おく寺てら政せい宗そう二に万まん余よ騎き物ぶつ取とり

押おし寄よせらせららととのの 御ご下げ急きふ
あり又また米こめ澤さわはは一いつ山やま形かたち出で羽は吉きち義ぎ
光みつ為な又また津つ川がわはは一いつ和わ田でん托たくおお寺てら利り
古ふる堀ほり左ひだり半はんのの智ち秀しゆ次じをを加かへへく

六百余騎 其公の内儀布の
白川口より押送する以先手なる
柳宗武親右輔康政也七月十九日
所進發の御儀より江戸中洲云
秀老卿 結城宰相秀康の松平
戸田重忠老若又由永長並び
和振の人々より井伊玄郷如輔
直政 本多中務右輔忠勝續て

酒井 大久保 松平 藤生 仙石
水野 谷 山川 石川 本多 田 本野
谷 志田 本多 和野 以先手 池
田 福崎 越後 等々 三拾三
羽 羽 合 志 辨 七 弟 隆 騎 之 七 月
廿四日 飛 到 小 山 口 所 急 陣 有 り
志 願 者 此 の 支 日 以 先 手 行 々
中 へ 世 界 此 風 流 等 々 々 々 々 々

上方増紀して石田三成送ん次
あゝりて雲森下向此軍も
申途より引返す又物西がこの
軍も京追へ大坂軍勢集むる
りつゝも所々ござる評判
せり申すも伏見より高尾内
度松平等の二名より河を早
追はせりつゝ中より来る報の既

石田三成が謀略を秀頼に此所
判を告ぐ大谷吉隆も此内
入徳おとあし合せ送徒京を
うつとらあつゝ上方の一系
初乱る及ぶ之行さぬ高尾
敵中にあれば定めて執るも
をまよふるもさあつゝ追
に子飛御引來あり

肉府公を種別小山をこの山
 師笑面けありさねばもや先
 庭さ白川は馳向ひし西も
 追々多く近し小山の御陣
 新は欠来る 秀忠公毛
 宇部美やうぐし師執之と久
 どもこの旨 師をいさる
 お参り候々中山は門入と久
 其を強初斜あはる園東さ
 あらう物玉中玉小玉とも
 知まよりその涙をよとく
 法人の心慮をめん あやぶ
 んで大い小怪色申くそ飛力
 毎一羽く唯強動をうりま
 物の分ちりるうりけり
 肉府公を恙く此度な御也

肉府公を種別小山をこの山
 師笑面けありさねばもや先
 庭さ白川は馳向ひし西も
 追々多く近し小山の御陣
 新は欠来る 秀忠公毛
 宇部美やうぐし師執之と久
 どもこの旨 師をいさる
 お参り候々中山は門入と久

ざら別家此西の皆の地
路り部く遠阿保の支
人を取て
うび石田治部少輔の御畧
後く上旨務初く及び物由一
めん千敵を放り去るる
んと次子の時く南りて小由又
部く前くは実赤と白服合てく
後

佐竹をと此今掃殿の陸先
を何とと素封んや併し西
の大坂へ人質をとるる事
るれを是飛く及ぶんあつとも
捨る難きの才一ありされがら
中くもいん店手あぜらるる延を
幸意るくやされべきあり
物又先く上様封んや又を

上旨へ馳せりて石田と務段と
交すべしや世淑めん
發云ふ仍く
心慮とお寢むまきありと
作出されり終る千徳大名も
こそば一太ののぬるんが誰一人
未ぶ兎角と申おき人も
爰小尾呂清洲の博と福と
家康も

左邊のち又正則を三出く申
らわの上松多別款のやうなれ共
是枝尾よりして糧一石田が輩
る本ええと大のしと差し
好ましくは實末を捨置りそ記
上洛ありて逆賊を討つと追討
志らくんまありと憚るる也
ねくのべよりんを石田甲州

もささくさ出でこれをもちありと
いふ山内討馬者一豊のりさく
海邊ささくさいふいふ此居城
をれを清人殺を入さられく
清らくさるりさ中らるる
内府公家一石く山内清是年
あしあし重子てこの頃今一急
ゆり後さへーと

作也さんらさくさ一因退去たり

と解油清

関ヶ原軍記二編卷の六終
油清

